

までの間に、河をへだて、二ならべる山なし、妹脊山と稱しがたし、此道は龍門の谷にて、伊勢へも紀州へも通る大道也、行人多し、龍門の谷長し、凡二十一村ありと云、兩山高くして谷迫れり、妹脊山より宮瀧へ行道も有、河上なり、

## 〔玉勝間 十二〕又妹背山

寛政十一年春、又紀國に物しけるをり、妹背山の事、なほよくたづねむと思ひて、ゆくさには、きの川を船よりくだりけるを、しばし陸におりて、此山をこえ、かへるさにもこえて、くはしく尋ねける、そは紀國の伊都郡橋本驛より四里ばかり西に背山村といふ有て、其村の山ぞ、すなはち背山なりける、いとしも高からぬ山にて、紀の川の北の邊に在て、南のかたの尾さきは、川の岸までせまれり、村は此山の東おもての腹にあり、大道は川岸のかの尾さきのや、高きところを、村を北に見てこゆる、道のかたはらにもやどもある、それも背山村の民の屋也、此山までは伊都郡なるを、その西は那賀郡にて、名手驛にちかし、かくて花の雪、卷にも、既にいへるごとく、妹山といふ山はなし、此背山の南のふもとの河中に、ほそく長き島ある、妹山とはそれをいふにやとも思へど、此島はたゞ岩のめぐりたてる中に、木の生しげりたるのみにて、いさ、かも山といふばかり高きところはなし、又此島を背山なりといふもひがことなり、そは川の瀬にある故に、瀬の山とはいふと心得誤りて、背山村といふも、此島によれる名と思ひたれど、然にはあらず、萬葉に、せの山をこゆとあれば、かの村の山なること明らけし、川中の島は、いかでかこゆることあらむ、さて又川の南にも、岸まで出たる山有て、背山と相對ひたれば、これや妹山ならむともいふべけれど、其山は背山よりや、高くて、山のさまも、背の山よりを、しく見えて、妹山とはいふべくもあらず、そのうへ河のあなたにて、大道にあらず、こゆる山にあざれば、妹の山せの山みえてといへるにも、かなはざるや、とにかくに妹山といへるは、たゞ背の山といふ名につきての詞のあやの